



謹んで新春の

ご祝詞を申し上げます

特定非営利活動法人

通院介護センター「さわやか」

理事長 山田 浩美



ボランティアの皆さん、利用者の皆さん、関係諸団体の皆さん、旧年中は大変お世話になりました。

「さわやか」も皆様のお陰で、滞りなく一年を過ごすことができました。これも一重に皆さまのご支援・ご協力の賜物と厚く御礼申し上げます。

昨年は、内外ともに「チェンジ」の年でした。「福祉有償運送」も、定着してきたと同時に、矛盾も露呈してきました。福祉目的、ボランティアで行っている、送迎事業を、道路運送法に規定した所に無理があったようです。今通常国会に、公共交通の理念を盛り込んだ「交通基本法」(案)が提出される予定です。新しい福祉運送の規定が決まるのではないのでしょうか。

「さわやか」第一五四号に記載しました、オンデマンドバスも、新しい運送システムとして注目をあつめています。過疎地で公共交通機関が廃止された所で、タクシー並みに、予約して、乗り合いバスで送迎するシステムです。

これからの運用を見ていきたいと考えます。

北九州市では、都市計画の一環として、ユニバーサル・デザインが提起されています。障害者が住みやすい街を目指して、計画が進行中です。

「さわやか」も積極的に、このユニバーサル・デザイン計画に参画して、障害者の送迎事業のよりよい利便性のために尽力する所存です。送迎事業も、年々変化・前進をしています。

「さわやか」も社会の進歩に乗り遅れないよう、今年も一年、努力・精進します。皆様の「ご多幸、ご健康、ご繁栄を心より御祈り致します」。

二〇一〇年 正月



新年にあたって

死を直視したときQOLを持ちうる

済生会八幡総合病院

院長 松股 孝



永井隆博士が『亡びるものを』のなかで、「生き残った級友は、いよいよ真剣に、落ち着いて勉強した。それは、これが一生最後の勉強となるかも知れなかったから」と書いて

います。人は生の向こうに透けて見える死を直視したとき、たとえ進行癌を患っていても、健康人と変わらぬQOLを持ちうると思います。

厄年に激しい腰背部の痛みと反射性の吐き気に見舞われ、私たちの悪い急性膵炎と判断しました。当時、急性膵炎で手術を受けた二人とも亡くなっていました。

したから、「これで仕事から解放されるな」と、激しい痛みの中で、ふと心安らぐ感覚に襲われました。啄木の「重い荷を下ろしたような気持ちになりました。あのほっとした感覚が今でも記憶に残っています」。

以来、何でも前向き志向になった医師から見れば、通院介護センター「さわやか」に所属している皆様は、先端医療がもたらした勝利を味わいながら、良い仲間を得ることができた、幸運な人々なのだと思います。とはいえ、治療を続けなければ死んでしまうという厳しい現実の中では、「さわやか」の事業のようなメンタル面も含めた支え合いが何よりも大切です。皆さまのご健勝と「さわやか」の事業の益々のご発展を祈っています。

